

鬼神様の贅姫
無能の少女は孤高の鬼に寵愛される

霧内杏 Haruka Kiriuchi



アルファポリス文庫

序章 桜

……はらはらと、桜の花びらが舞い落ちる。

「おまたせいたしました」

白無垢姿で、庭で待っている彼の元へと向かう私が見える。今が盛りと咲き誇る桜は、まるで夢のように美しい。

「桜、凄く綺麗ですね」

隣に立った彼を見上げて私が微笑む。しかし、彼の顔はわからない。

「そうか？ やつがれはお前のほうが綺麗だと思うが」

ちゅつと軽く彼の唇が私の唇に触れ、私の頬がほのかに赤くなった。

「えっ、あっ、私ごときが桜よりも綺麗などありえませんか……」

「ひさしぶりに聞くな、お前の私ごとき。以前のお前はなにかといえれば私ごときばかりで、そういう枕詞でもあるのかと思ったぞ」

くつくつとおかしそうに喉を鳴らし、彼が笑う。それに少し、私は腹を立てている。

「笑わないでください！ 私はもう、あの頃の私ではありません」

「そうであった」

私が怒っても、彼はやはりおかしそうに笑っている。なのに私は、嬉しそうだ。

「本当に、あの頃からは見違えるほど美しくなった」

彼の手が伸びてきて私の頭に触れる。離れたその指先は花びらを摘つまんでいた。

「自慢の、やつがれの嫁だ」

彼にそう言われ、私の顔が誇らしげになる。

「あなたには感謝してもしきれません」

私は彼に向かって深々と頭を下げた。

「やつがれはなにもしていない。お前が変わりたいと願い、頑張ったのだ」

「私が変われたのは、あなたのおかげです」

顔を上げると、彼は私の頬に触れてゆつくりと口を開く。

「――」

突然、強い風が吹き、視界が花びらに埋め尽くされてなにも見えなくなった。風音が酷く、彼がなんと言ったか聞き取れない。彼の姿を見ようと花びらを振り払ったところで……目が、覚めた。

「……夢、か」

布団を引けばいっぴいになる納戸の中に、私の声が虚しく響く。夢の中の私は幸せいっぴいのように見えたが、現実の私は薄くかひ黴臭い布団にくるまって震えていた。

「……起きなきゃ」

夢の残滓を振り払うように、朝だというのに重い身体を布団から引き抜く。あれはただの夢だ。それこそ私ごときが、この家から出られるなんてありえない。――そう、思っていた。

第一章 無能

「……さむ」

裏庭を掃きながら、息を手に吐きかけて擦りあわせる。空は分厚い雲で覆われ、今にも雪が降り出しそうだ。そうなれば、今着ている粗末な木綿の着物では耐えられないだろう。しかし私がついているのは、擦り切れ今にも破れそうなこの一枚きりだった。

じつと空を見上げていたところで掃除は終わらないので、再開する。木々はすっかり葉を落とし、色のない世界はまるで、私の心のようにだった。

「涼音！」

「はい、ただいま！」

私を呼ぶ声がし、駆け出す。そこでは年嵩の女中が腕を組んで仁王立ちになり、私を待っていた。

「床下に猫が入り込んだ。捕まえてきておくれ」

「は、はい！」

命じられるがままに床下に潜り込む。書類上、私はこの家の長女だが、扱いは下女以下だった。

母である雪姫が死んだのは、私が五つ小的时候だ。歴代一、二位を争う先読みの異能があった母は、名門蒿里家の次期当主で火を操る異能を持つ父と結婚した。いわゆる政略結婚というものだ。別にこの世界では珍しくもない。

異能は神から授かったものだとされている。直接、神より力を与えられた者が帝となり、さらに帝に力を分け与えられたのが貴族で、異能を持たぬ下々の者たちを助け、指導していった……というのが、伝えられているこの国の成り立ちだ。

貴族同士の争いや開国など幾度かの騒乱はあったが、帝がいて異能を持つ貴族たちがこの国を動かしていくというのは変わらない。

異能の種類は人によって異なる。多くは火や水、風、土を操る力だが、稀に先読みや念動の力を使える人間が生まれる。その珍しい力を一族のものにしようと政略結婚がおこなわれた。母と父もそれだった。

ただ――父には以前より、囲っていた女性がいたのだ。

結婚したあとも父はその女性の元に通い続けた。母の死後、その女性を正妻として迎えたわけだが、そのときには私よりも生まれが数ヶ月遅いだけの妹がいた。

それだけならまだよかったのかも知れない。父が再婚してしばらくは、邪険にされ

ながらも蒿里家の娘として扱ってもらえていた。しかし、数えて七つになったときに状況が変わった。

「花、蝶、鹿」

妹の紫乃が目の前に置かれたカードを指さしていく。

表面に絵の描かれたカードは、異能の判定によく使われた。多少なりとも異能があるものならば、裏返された状態でもなんの絵なのか当てられる。また、当てたカードの数で力の強さもある程度わかかった。

紫乃が予想し終えると、控えていた女中が順番にカードを捲っていく。紫乃が言ったとおりの柄が現れた。

「凄い、全部正解だ」

「蒿里家の娘だもの、これくらいできて当然よ」

父と義母は大喜びし、紫乃は得意満面だ。その隣で私はひとり、心細い思いをしていた。

……大丈夫、落ち着いてやればできる。

そう言い聞かせ、同じように目の前に伏せて置かれたカードを見つめる。しかし、いくら見つめたところでもなにも見えてこない。

「どうした？」

いつまでもなにも言わない私に父が怪訝そうに聞いてくる。

「まさか、見えないとか？ そんなはずないですよね、お姉さま」

先にすべてを当てた妹は完全に私を見下していた。悔しくて俯いて唇を噛む。必死に黒く塗られた紙のその向こうを見ようとしたり。けれど、やはり少しもわからない。

「早くしないか」

とうとう、父が痺れを切らしはじめる。このままでは失望されるだけだが、なにかなんげば万にひとつでも当たってこの場を取り繕えるかもしれない。そう腹を括り、震える唇を開く。

「鶴と、猪と、……蝶、です」

私の答えを聞いて父が頷き、順に女中がカードを捲っていく。

最初は……鳳凰。

「はっずれー」

嬉しそうに紫乃がけたけたと笑う。

次は月。

「またまたはっずれー」

最後は……猪。

「あー、惜しかったわね、お姉さま。はずれには違いなんだけど」

すっかり血の気も引いて固まっている私を、妹は優越感に浸った目で見ていた。

「本当にお姉さま、蒿里家の……うん。あの雪姫さまの娘なの？」

私をバカにする紫乃の声が岩山のように重く身体にのしかかる。

「オマエにはほとんど失望した」

あきれかえった父のため息を聞き、身体がびくりと跳ねた。

「世間体があるから置いてやる代わりに、これからは紫乃に尽くして生きる」

「は、はいっ……！」

異能を持っていない、無能な私はその場に這いつくばるしかなかった。

貴族の世界は狭いので、あつという間に蒿里家の長女は無能だと広まった。当然、母の生家にも。以前は私を引き取ると蒿里家と揉めていたが、私が無能だとわかった途端、ぴたりとそれもなくなった。無能はどこの家でもお荷物なのだ。

それ以来、私は家族ではなく下働きとしてこの家に置いてもらっている。

「猫、猫ちゃん」

暗く狭い床下を這いずり回り、猫を探す。早く見つけなければ大変なことになる。いや、猫を逃して私が叱責されるだけならいいのだ。

蒿里家にとって猫は、忌み嫌う存在だ。その昔、ご先祖様が帝の猫を逃がして不興

を買ってしまった、それ以来、冷遇されているのを不満に思っているらしい。

しかしそれが外国から友好の証しとして送られた特別な猫で、しかも当時の蒿里家当主が娘に見せてやろうと勝手に連れ帰って逃がしたとなると、自業自得としか思えない。

それだけでなくも開国するしないで国内は紛糾し、諸外国との関係は微妙な時期、下手をすれば国際問題に発展して戦争が起きかねなかったのだ。家がお取り潰しにならなくてよかったと感謝してもいいくらいだ。

けれどそういう具合で特に父は猫を毛嫌いしているので、見つかったら殺しかねない。なんとしても父に見つかる前に猫を捕まえて、外に逃がさねば。

「猫ちゃん、どこー？」

「にゃーん」

そのうち、どこからともなく猫の声がした。声を頼りに近づくと猫が蹲すくまっている。

猫はおとなしく、私の腕に抱かれてくれた。

猫を抱いてまた、床下を這う。入ったところとは違う、人目のないところから出て、猫を敷地の外へと放した。

「もうここに入ってきてはダメよ」

「にゃーん」

猫は返事をするように鳴いて去っていったが、本当にわかったかどうか。きっと私は猫を逃がしたと激しく叱られるだろうが、それでも猫が無事なほうがいい。「こんな可愛くないのじゃダメ！ 明日は啓輔様にお会いするのよ！」

猫が見えなくなりほっとしたところでヒステリックな紫乃の声が聞こえてきて、びっくりと身体が大きく震えた。

「もっと最先端の、お洒落なものはないの!？」

彼女の無理難題に女中たちが右往左往している気配がする。その緊張感は私にまで伝わってきた。

「そうだわ！ このあいだ、『五桐呉服店』で見た、あの髪飾りがいいわ！ すぐに取り寄せてちょうだい」

紫乃はまるで隣の部屋にでも取りに行かせる感じだが、ここから五桐呉服店までどんなに急いでも三十分はかかる。しかも日はすでに傾きはじめており、閉店時間までいくらない。

「紫乃お嬢様。別のもので勘弁していただけませんか」

「ダメよ、啓輔様には気に入っていただいて、高里の家をさらに引き立てていただかないといけないのだから」

女中に宥められても紫乃は聞く耳を持たない。啓輔とは侯爵である三鷹家の嫡男で、

伯爵の父よりも立場が上。紫乃なりに家のことを真剣に考えているのか——それとも、啓輔が世を騒がせるほどの美男子で、彼のお眼鏡にかないたいだけなのかは私にはわからない。

「すぐに使いを出して。そうだわ、お姉さまに行ってもらいましょう。お姉さま、涼音お姉さま——」

「はい、ただいま！」

呼ばれた瞬間、条件反射で紫乃の元へと駆けていた。

「もう。遅いわ、お姉さま。私が呼んだらすぐに来てっていつも言ってるでしょ？」

「も、申し訳ありません」

その場に平身低頭して謝る。とにかく妹の機嫌を損ねてはいけけない。

「しかもなにそれ？ そんな汚らしい格好で私の前に来ないでくれる？」

「申し訳ありません」

紫乃の声は酷く不快そうで、慌てて頭や顔を手で拭った。先ほど、床下に潜ったせいで蜘蛛の巣や埃が私にまとわりついていた。

「まあいいわ。ちょっと五桐呉服店までお使いに行ってきた」

呆れるように彼女が小さくため息をつき、叱責は免れたのだと安心したのも束の間。すぐに無謀なお願いを彼女はしてきた。

「その。……まもなく閉店時間ですが」
おそるおそる、遠回しに無理ではないかと進言してみる。途端に紫乃の機嫌が悪くなった。

「……この私が、行けって言っているの」
「でも、その」

行ったところで店は閉まっていて、目的のものは手に入らない。それに夕食にも間に合わないだろう。

「おかあーさまー。おねーさまが私のお願い、聞いてくれないんだけどー」

紫乃が声をかけると、奥から義母が姿を現した。

「どういうことかしら？」

不機嫌そうに義母の片眉と語尾が上がっていき、身が竦んだ。

「オマエ、可愛い妹の頼みが聞けないの？」

「い、いえ。決して、そんなわけでは」

ガタガタと震えながら、床に額を擦りつける。このあいだは気が済むまで竹鞭で打たれた。その前はもう霜が降りる季節だというのに、水を張ったたらいの中で何時間も正座させられた。今日はいつたい、なにを。

「じゃあ、行つてらっしゃい」

義母が閉じた扇子で私の顎を持ち上げる。目があうと彼女は赤い唇を歪ませ、にたりと笑った。

「ちゃんと持つて帰るまでは家に入れないからね」

「あっ」

早く行けといわんばかりに蹴られ、身体が崩れる。

「は、はいっ……！」

もう一度、土下座の体勢を作つて頭を下げた。

夕闇に染まりはじめた町をひたすら走る。その脇を路面電車が走り抜けていった。……あれに乗ればすぐなのに。

しかし運賃の四銭すら持たせてもらえなかった。

「あっ」

そのうち、下駄の鼻緒が切れてつんのめって転んだ。昼間降った雨で道はぬかるんでおり泥だらけになったが、気にしている暇はない。下駄を脱いで手に握り、また走る。しかしようやくやくたどりで着いた五桐呉服店は、すでに明かりが消えていた。

「すみません、開けてください！ すみません！」

ドアを叩くがびくともしない。

「お願いします、開けてください。開けて……！」
無駄だと知りつつ声が嘎れるまでドアを叩く。騒ぎに気づいたのか、そのうち守衛らしき中年男性が出てきた。

「無駄だよ。もう閉まってんだ、帰った、帰った」

迷惑だとばかりに男が邪険に私を追い払う。

「そこをなんとか！ なんとかお願います……！」

このまま帰ってはただでは済まない。必死になって男に縋りついた。

「そう言われてもね……」

完全に男は困り切り、頭を掻いている。それを祈る思いで見上げた。少ししてなにかに思い至ったのか、男が私の顔を見る。

「番頭に頼めばもしかしたら開けてくれるかもしれん」

「番頭さんはどこにいるのですか!？」

「それは……」

あまりにも私に悲壮感が漂っていたからか、男は番頭の家を教えてくださいました。

「ありがとうございます！」

お礼もそこそこに再び駆け出す。

番頭は会ってくれたが、私が蒿里の家の者だと言っても信じてくれなかった。それ

はそうだろう、身を包むのはみすぼらしい木綿の着物、しかも転んで泥だらけだ。

「嘘じゃありません！ 家に連絡して確認してみてください！」

私がしつこく食い下がるものだから、番頭はどうとう鬱陶しそうにため息をついた。どうやったら信じてくれるのかと必死に考えた末、懐から大事にしているお守り袋を取り出した。

「母の形見です」

お守り袋には母の生家の紋が刺繍されていて、持つことを許されているのは一族の者だけだ。母の死後、ほとんどのものが父に義母たちに取り上げられたが、これだけは私の手もとに残された。

「……わかった」

家紋の入ったお守り袋を見て、ようやく番頭は私が蒿里の家の者だと信じてくれたようだ。蒿里家の長女は無能だと界限では有名だから知っていたのだろう。しかし、私に取りに行ってこいと命じたのに、紫乃も義母も連絡を入れていないようだ。

洪々な様子で店に戻り、番頭は改めて蒿里の家に電話をかけた本当に間違いないか確認を取っていた。汚して迷惑にならないように土間の隅で小さくなって待つ。

「ほら」

少しして番頭は紫乃の欲しがっていた髪飾りを包んで渡してくれた。

「ありがとうございます……！」

「おい、今からひとりで帰るのか？」

頭を下げた荷物をしつかりと抱え、家に向かって駆け出そうとしたところで番頭が声をかけてくる。

「はい。本当に、ありがとうございます」

もう一度、番頭に頭を下げた足を踏み出す。

「待て、暗くなって女ひとりじゃ……」

番頭がすべて言い終わる頃には、私はもうかなり先まで進んでいた。もしかして私を心配してくれたのだろうか。いや、そんなはずはない。

暗い夜道を足早に急ぐ。こんなに遅くなって、妹は怒るだろうか。義母に叱責されるだろうか。この時間ではもう、夕食にありつくのは絶望的だ。

……おかしい。

次第に足は遅くなり、そのうち立ち止まっていた。もう大通りに出ていいはずなのに、いくら歩いてもその気配はない。

「……どういう、こと……」

戸口をぴたりと閉ざした家々がずっと先まで続いている。振り返った先も同じような景色で、どちらも果てがないように見えた。そんなはずはないのだ、この道はそこ

まで長く真つ直ぐな一本道ではない。

きよろきよろとあたりを見渡しながらおそるおそる歩を進める。

通り一本向こうには路面電車がこの時間でも走っているはずなのに、その気配もない。いつもならうつすらと見える大通りの明かりも喧噪も、感じられなかった。

私の荒い息づかい以外、なにも聞こえない。人っ子ひとりどころか猫一匹もおらず、ただ月明かりだけが心細く私を照らす。

とにかく早く帰らねば。気にしている暇などない。

意を決し、また駆け出す。しかし間の悪いことに霧まで立ち籠めはじめ、頼みの綱だった月まで隠してしまった。

怖くて怖くて、必死に走る。——すると。

「おっと！」

「きゃっ！」

唐突に横道から出てきたなにかにぶつかって、尻餅をついてしまった。

「あ……」

ぶつかっただのは人だが、天を衝くほど大きく見えた。

「大丈夫か？」

「ひっ」

私などが迷惑をかけてしまい、きつと怒鳴られる。もしかしたら殴られるかもしれない。恐怖を感じ、頭を抱えて小さく身体を丸めた。

「すみません、すみません。申し訳ありません」

そのときが来るのをただ怯えて待ったが。

「なあ。なんでコイツ、こんなに怯えておるのだ？」

「そりゃ、あんたが怖いからでしょ」

呆れるようなもうひとつの声が聞こえてきて、あたりが少し明るくなった。現れたもうひとりの手にはカンテラが握られている。

「心外な。やつがれは気に入らない人間以外には優しいぞ」

「はいはい」

ふたりはのんびりと話していて、まるで緊張感というものが無い。もしかして怒っていないのだろうか。そろりと頭を上げた瞬間、すぐ近くに顔が現れた。

「おい」

「ひっ」

反射的に悲鳴が出る。目の前の人は嫌そうに顔を顰めた。

「こんなところでなにをしているのだ？」

しゃがんで目線をあわせ、私に話しかけてきた男は、サーベルを下げた軍服姿だっ

た。しかし軍人らしからぬ長い白髪で、右目側の額には立派な角が生えている。左の角は折れてしまっていた。

後ろに見える彼も同じく軍服姿だったが、こちらは角は生えておらず、若い男性だ。

「最近、人攫いが出るのを知らぬのか」

異形の口もとから鋭い牙がのぞく。赤い目がさらに、私の恐怖を掻き立てた。

「申し訳ありません、申し訳ありません。謝りますから、食べないでください……」

また頭を抱えてぶるぶると震える。きつとこの、異形の妖術に嵌まったのだ。いつまでも同じところを走らせ、弱ったところを食べるつもりだったんだ。

……ううん。この異形に食べられてしまえば、果てしなく続くと思っていたこの地獄のような生活も終わるのだろうか。

不意にそんな考えが頭を掠めていく。

「……わ、私を」

震える手で、異形の腕を掴んだ。

「ん？」

「私を、食べてください……」

もうなにもかも終わらせてしまいたい。それで、母のところへ行きたい。「はあっ。やつがれはお前を喰ったりしない」

異形の腕が私を包み込む。意外なことに異形からは血のおいではなく、日向の匂いがした。懐かしく幸せなその匂いを吸い込み、身体の力が抜ける。

「……しかし」

鼻を突っ込むようにして、異形は私のうなじのおいを嗅いできた。

「なんかいい匂いがするな、お前」

すんすんと鼻を鳴らし、異形は私のおいを嗅ぎ続ける。

「こんな上質な霊力の匂いは初めてだ。……決めた。お前をやつがれの嫁にする」

呟いたかと思ったら、異形が私の首筋に歯を立てる。痛みが私を襲ってきて、そこで意識が途切れた。

目が覚めたら自室として与えられている納戸だった。

「夢……。いたっ」

起き上がると左の首筋が痛む。触ってみて違和感はあるものの、鏡がないので確認まではできなかった。

身支度をしようとするが、着物は昨日のあれで泥まみれだ。こんなものを着ていたら、義母たちから叱責される。しかし私は、これ一枚きりしか着物は持っていなかった。

「……はあっ」

ため息をついて納戸の戸を開けた。手ぬぐいを濡らしてきて、少しでも汚れを落とさねば。けれど一歩出たところで足になにか当たった。

「あ……」

そこには小さく折りたたまれた着物が置いてあった。それを抱え、きよろきよろとあたりを見渡したが誰もいない。

「……ありがとうございます」

姿の見えぬ相手に向かって頭を下げた。たまにこうやって、誰かが不要になったものを私に恵んでくれる。それがありがたかった。

手入れもせず乾燥し痛んでいる髪を手早くおさげにし、もらった着物に袖を通す。

結局、私はお使いの品をどうしたのだろうか？ きちんと紫乃の手に渡っていればいいが、そうでなければ激しい叱責が待っている。

そもそも、私はあれからどうやって帰ってきた？

異形に会ったところから夢だったのだろうか。それにしてもやはり、噛まれた首筋が痛む。

いつ、紫乃や義母に呼ばれるだろうかとびくびくしながら過ごす。朝食が終わっていくらしもない頃、父たちに呼ばれた。

「あらお姉さま、着物を新調なさったの？」
部屋に入ると、紫乃の視線がちらりと私に向く。

「貧乏くさいお姉さまがさらにみすばらしくなって、とてもお似合いよ」

高らかと紫乃が声を上げて笑う。くすんだ濃い灰色のような山鳩色の着物は、若い娘どころか年寄りでも敬遠しそうだが、私にはこれしかないのだから仕方ない。それに、裸よりマシなので別によかった。

私をはるか末席に腰を下ろしたのを確認し、父が口を開く。

「オマエに縁談の話が来た」

「私に、ですか……？」

無能の私に嫁のもらい手など現れるはずがない。父は冗談でも言っているのだろうか。

「そうだ。さるお方が、オマエを嫁にもらいたいそうだ」

「はあ……」

そう言われてもにわかには信じられない。何度も言うが私は無能で、なんの価値もないのだ。

「お父さまあ。はつきり言って差し上げたほうが、お姉さまのためですわ」

ちらつ、ちらつと断続的に私へ視線を送りながら、紫乃はイヤらしく顔を歪めて

笑っている。

「そうですね、あなた。どうせ、嫁げばわかるのですし」

同意だと義母が頷く。

「それもそうだな」

父は気を取り直すように小さく咳払いし、真っ直ぐに私を見た。

「異能特別部隊は知っているな？」

「……はい」

異能を持つ名門貴族で構成されている特殊部隊。軍の中でもエリート中のエリートだ。そんなところの方が私を？ それこそ、考えられない。

「その部隊の白瑛びやくい様が、オマエを欲しいそうだ」

それを聞いた途端、戸がガンツと思いつき閉まったかのごとく目の前が真っ暗になった。身体がぐらりと揺れ、思わず畳に手をつく。

白瑛様とは異能特別部隊で飼われている鬼だ。戦闘力は高いが気性が荒く、長官以外は手に負えないと聞く。そんな鬼が、私をもらいたいと？

「……嘘。そんなの嘘ですよ、お父様」

「嘘ではない。よかったじゃないか、オマエをもらってくれる人が現れて」

父は本気で言っているのだろうか。嫁げばきつと、殺される。いや、嫁なんて言っ

ているが、実際は生贄^{いけにえ}なのでは。

恐怖でガタガタと身体が震える。夢の中で楽になれるのならばと死を願っていたが、そのために酷い苦痛を与えられるのは、やはり怖い。

「お願いです。なんでもします。後生ですから勘弁してください……!」

ひたすら畳に額を擦りつけ、懇願する。殺されに行けなんて惨すぎる。

「もう決まったことだ。それに、オマエを生贄^{いけにえ}に差し出さねば我が家にまで害が及ぶ」

冷たく父が言い放つ。私よりも家が大事。わかってはいたけれど、いざ言葉にされると衝撃が大きかった。

「午後には迎えに来るとのことだ。準備をしなさい」

「……はぐ」

諦めの気持ちで畳の目を見つめた。もうこれは決定事項なのだ。私がいくら懇願したところで覆らない。それに無能の私を置き、ここまで育ててもらった恩もあるので拒否できなかつた。

「しかし」

父の言葉で若干の希望が湧き、頭を上げる。

「その着物で嫁に出すわけにはいかないな。紫乃、オマエの着物を一枚、涼音に譲っ

てやりなさい」

けれど期待した言葉ではなく、すぐに失望へと変わっていった。

「えー、いやよう、お父さまー」

本当に嫌そうに紫乃が父に抗議する。

「わがままを言うな。代わりに新しい着物を二、三枚、買ってやる」

「え、ほんとに？ じゃあ、仕方ないわ」

嫌々という顔を作りながらも、紫乃の顔は緩みかけていた。長女の輿入れは妹のお古、妹にはなにもなくても新しいものを買ってやる。これがこの家では当たり前だった。

これで話は終わりだと父は腰を浮かせかけたが、なにかを思い出したかのように再び私の顔を見た。

「オマエ。昨日、猫はどうした」

突然、訪れた現実に動揺して最初はなんのことだかわからなかったが、すぐに床下へ探しに行ったあの猫のことだと気づいた。

「私に追いかけてどこぞへ逃げてしまいました」

額を畳に擦りつけ、父の処罰を待つ。

「そうか、運のいい奴め。猫も、オマエもな。今日は嫁ぐはなむけに許してやる」

「ありがとうございます……！」
めり込むのではないかとという勢いで額を畳に押しつけた。父の叱責を免れただけ、よかったと思おう。

そのあとは紫乃の部屋へ連れていかれた。納戸で寝起きしている私と違い、紫乃の部屋は広く、西洋のランプや家具を取りそろえてあって豪華で目眩がする。

「まあね、昨日はちゃんと『取ってこい』ができたし、ご褒美はあげないとね」
私を床に座らせ、紫乃はタンスを「ごそとあさった。その髪には昨日、お使いに行つて受け取つてきた髪飾りが挿してある。ちゃんと頼まれたものは紫乃の手に渡つたようで、安心した。

「これなんかどうかしら？」

紫乃が手にしていたのは大柄な市松模様の振り袖だった。竹模様があしらわれているそれは祖父から贈られたものだが、野暮つたくて気に入らないと言つて一度も袖を通していないのを知っている。

「ほら。着せてあげる」

「えつ、あの。自分で、着ますので」

私が断ると、みるみる紫乃の機嫌が悪くなっていく。

「この私が着せてやるつて言ってるの。早く脱いで」

「は、はご」

紫乃に睨まれ、怖くなった私は帯に手をかけた。

「なにこれ」

私の首筋を見て紫乃は驚いている。前に置かれた鏡には、くつきりと噛傷が映つていた。

「どこでこんなもの、つけてきたのよ」

呆れ気味にため息を落としながら、紫乃が私に襦袢を着せていく。

「帰りが遅いと思つたら、どこぞの男と遊んでいたの？ ああ、イヤらしい」

俯いて唇を噛みしめた。男と遊んでなどいない。もう店が閉まる時間に使いに出され、大変だったただけだ。あんな時間に町を駆け回つたせいであんな……あんな？ あれは夢だと思つていたが、実際に起きたことだったのだろうか。

「お姉さまが生娘じゃないと知つたら白瑛様、激怒して殺しちゃうかもね」

ころころとおかしそうに紫乃が笑い、ぞつとした。

私に着物を着せ、小物はどれにしようかと紫乃は悩んでいる。派手な着物は地味な私にはまったく似合つていなかった。先ほどまで着ていた、山鳩色の着物のほうがまだいいのではないかと思うほどだ。

「あの。昨日は私、どうやって帰つてきたのでしょうか……？」

紫乃の機嫌を損ねないようにおそるおそる尋ねる。
 「若い将校さんが、道に倒れてたつて連れてきたわ。そのときにお姉さまを白玖様の妻に迎えたいつておっしゃって。……うん、決まった」

紫乃に帯を締めてもらいながらほんやりと、昨日、異形と一緒に若い軍人がいたの
 を思い出した。彼が家に送ってくれたのだろうか。

「お姉さま、細すぎて帯が余っちゃう」

紫乃はぎゅっときつく帯を引っ張り、うらやましそうにため息をついた。

「こんなにガリガリだと、食べるところがなくてがっかりされちゃうかも」

不吉なことを言われ、肩がびくりと跳ねる。

「やだあ、冗談よ、冗談」

私が恐怖で固まっているからか、紫乃はおかしそうにけらけらと笑った。

「……ま、食べられない保証はないけれど」

紫乃の言うとおり、相手は鬼。人間に使役されているとはいえ、本性は物の怪なのだ。なにをするかわからない。それでなくても白玖様が戦場に立てば、敵はおろか味方も無事ではいられないと言われている。

「はい、できあがり」

鏡の中の私は、お世辞にも着物が似合っているとは思えなかった。朱色と生成りの

市松模様の着物に、黄色と黒の縞の帯、帯揚げは赤で帯締めは新橋色など、ちぐはぐも甚だしい。

「とーってもお似合いよ、お姉さま」

紫乃はイヤらしく目を歪め、にたにたと笑っている。私に恥を搔かせたいのだろうが、どうでもよかった。

「そうだ。はなむけにお姉さまの未来を視てあげる」

私の手を取り、紫乃は椅子に座らせた。紫乃には異能の中では珍しい、先読みの力がある。しかもそれは百発百中で、彼女に視てもらおうと多くの人間が金を積んだ。

私の前に座り、紫乃がタロットカードを広げていく。西洋から来たそれが、最近の彼女のお気に入りだ。手際よくカードを切り、テーブルの上で横一列に広げる。

「好きなのを一枚、選んで」

「じゃ、じゃあ……これ」

適当なカードを指さす。紫乃がそれを裏返すと、鎧姿の骸骨が馬に乗っている絵が出てきた。

「死に神の正位置ね」

「死に神……」

それはいかにも私の行く末を暗示しているように思える。

「そう。お姉さま、死ぬんじゃない？」

不吉な予言をしているのに、紫乃は嬉しそうだ。

「もっと詳しく視てあげる。手、貸して」

「……はい」

私がいくらも手を出さないうちに、紫乃は強引に掴んだ。

「きつたない手ねー」

私の手を見て、彼女が顔を顰める。あかぎれができしもやけで腫れている手は、白魚のような紫乃の手とは比べものにならないくらい醜く、引つ込めたくなくなった。けれど紫乃がそうさせないように力を込めて握っていてできない。

私の手を紫乃の両手が包み込む。こうやってその人の未来を読むのだ。

「……視えたわ」

紫乃はまぶたを閉じたまま、今、自分に視えている未来の光景を語りはじめた。

「白髪で片角の鬼の手が、お姉さまの胸を貫いている。お姉さまの見た目は今と変わらないように見えるし、きつとそう遠くない未来ね。雪が積もってるから、季節は冬かしら？」

私から手を離し、紫乃がゆっくりとまぶたを開く。

「あの鬼はきつと、白瑛様ね。今、帝都に鬼なんて白瑛様しかいないもの。ご愁傷様、

お姉さま。嫁いだ先の旦那様に殺されるなんて」

にいつと紫乃の口角が上がる。それはとても、嬉しそうだった。

ようやく紫乃から解放され、自分の部屋に戻って残りの時間で身の回りを整理してしまう。といっても、持っていくものはほとんどない。

「ここももう、最後か……」

薄くて黴臭い布団を敷けばいいになる納戸だったが、それでも出ていくとなると淋しかった。それが、殺されるためとなればさらに。

鬼——妖とは人に悪意を向け、害をなすものだ。とはいえ、表向きは白瑛様などの一部を除き、いいものとして取り扱われていた。開国して新しい世になり、古くさい迷信である妖などこの世にいるはずがない。それが、建前だ。

しかし妖は確実に、いる。妖が起こす事件はあとを絶たず、異能特別部隊が秘密裏に処理していた。

「ひと思いに殺してくださいるかしら……」

私の口から重いため息が落ちていく。一瞬だけ痛いのを我慢すればこの地獄から解放されると思うと、悪くない。しかし、相手は鬼。生きたまま食べて苦痛を長引かせるなんてこともしそうで、やはり怖かった。

「涼音。白瑛様がお見えたよ」

「はい、ただいま」

そのうち、女中が呼びに来て、重い腰を上げる。玄関では軍服姿のふたりが待っていた。片方の白髪の人物を見て目眩がする。彼は昨晚、私を食べようとした鬼だ。

「一晩ぶりだな、花嫁殿」

なぜか凄く気さくに鬼が私に声をかけてくる。

「ちよっと。自己紹介が先ですよ」

そんな鬼の態度を見て、隣の若い軍人は頭が痛そうにため息をついた。

「そんなの、車の中ですればいいだろ」

「えっ、あっ！」

鬼がいつも簡単に、私をひょいっと肩に担ぐ。

「それにしても婚が花嫁を迎えに来たのに誰も挨拶に出てこないなんて、失礼な家だな、おい」

「それだけあなたが嫌われてるってことでしょ」

私が手に持っていた風呂敷包みを取り、若い軍人はため息をつきながらついてきた。表には車が停めてあり、後部座席へ放り込むように乗せられる。すぐに若い軍人が運転席に座り、車を出した。車なんて贅沢なと思ったが、名門貴族で構成される特別部隊だ、車くらいあってもおかしくない。

「昨日も思ったがお前、軽いなー。骨と皮ばかりで食い出がなさそうだ」

「ひっ」

鬼が私の顔に触れ、鋭い爪が頬に当たる。おかげで、悲鳴が漏れた。

「た、食べないでください……」

私が身を小さく丸めてガタガタ震えだし、鬼と若い軍人はなぜか顔を見あわせている。

「あんた、食べられると思われてますよ」

若い軍人がくすくすと笑い出し、わけがわからない。

「あんな」

鬼は困ったように頭を掻いている。

「やつがれは人など喰わん。公通（どうとく）に使役されているから喰えないわけではなく、生まれてこの方、人など喰ったことがない」

「本当に……?」

しかし、ならば昨晚、なんで私に噛みついたのだろう。

「特にお前は喰ったりしない。こんなに上質な、靈気のいい匂いにするのに喰ってしまうのはもったいないからな」

「ひっ」

鬼においを嗅がれ、また悲鳴が漏れた。

「どーでもいいですが、自己紹介をしてあげないと可哀想でしょうが。こんな、人攫いみたいに連れてきて」

「ああ、そうだな」

若い軍人に注意され、ようやく鬼は私から顔を離れた。

「やつがれは白瑛。公通に使役されている鬼だ。こっちはやつがれの下僕こもの菰野」

「違いますよ、あなたの散歩係です」

すかさず若い軍人——菰野さんが訂正してくる。しかし、散歩係とはどういう意味だろう？

「えっと……」

「いわゆるお目付役です。この人が勝手に、なんかしないように見張っています。まあ、主人に頼まれて飼い犬の散歩をしているようなもんなんで、散歩係です」

「は、はあ……？」

あつげらかんと菰野さんは言ってきたが、ちよつと理解が追いつかない。

「で、お前は今日からやつがれの嫁というわけだ」

なにかの冗談かと思っていたが、鬼——白瑛様は私を嫁と言った。けれどまだ、信じられない。それに嫁でもいろいろあるはずだ。

「これからよろしく頼むな、涼音」

お下げにしている私の髪を片方取り、白瑛様はそこへ——口づけした。さらに目を細め、うっとりとして私を見ている。

「えっ、あつ、その」

今までそんな扱いをされたことのない私は、どうしていいのかわからずに固まった。

第二章 嫁ぎ先

連れてこられたのは西洋風の大きなお屋敷だった。

「立派な家……」

人に使役されている鬼だから、もつと檻などに入れられているのかと思っていた。いや、ここがご主人様のお屋敷で、白珠——旦那様が住んでいるのはその中にある檻の可能性もありうる。

もつとも、今まで寝起きしていた納戸が檻に変わったところでもない。いや、檻のほうが布団を引けばいっぱい納戸よりも広いかもしれない。

「なにぼやつとしている。こっちだ」

手を掴まれたが反射的に振り払っていた。私の汚い手を、知られるのが嫌だった。しかしすぐに、こんな反抗的な態度を取って怒鳴られるのではないかと思い、身がまえる。

「ほら、来い」

しかし彼は一瞬間固まったものの、次の瞬間は何事もなかったかのように私の背中を

軽く押し、来るように促してきた。

……怒らないの？

それが酷く不思議だった。

使役されている身分なのに、正面玄関から旦那様は入っていく。中は上がりかまち框などなく、土足だった。彼は堂々としていたが、私は咎められるのではないかとびくびくあたりをうかがっていた。

「おかえりなさいませ。旦那さま、孤野さま」

ちょうど通りかかった女性が声をかけてくる。彼女は黒の洋服姿で、白のエプロンをしていた。しかし、旦那さま旦那さまって？。この屋敷の主人は旦那様なの？

「帰った。お茶の準備を頼めるか？ 孤野の分とあわせて三人分」

「え、僕はもう帰りますよ」

少し嫌そうに孤野さんは断る。

「もう少しいいいだろ。公通にビスケットをもらったのだ」

「あ、じゃあもう少し」

ビスケットがあると聞いた途端、孤野さんの顔が嬉しそうになった。

旦那様は遠慮なく屋敷の中を進んでいき、居間と思われる部屋に入った。さらに置かれていたソファーに迷いなく座る。どうしていいのかわからなくて戸惑っていたら

手首を掴まれ、強引に隣に座らされた。菰野さんは斜め前に置かれている、ひとりだけのソファーに勧められなくても座っている。

「さてと。改めて自己紹介しよう。やつがれは白瑛。異能特別部隊の長官、綱木公通に使役されている鬼だ」

「鬼……」

わざわざそう説明されなくても、額から生える片角がそれを証明していた。

長さは五寸……私が手のひらを広げて親指から小指までよりも多少、短いくらいか。乳白色で上に向かって少し、湾曲して生えていた。人にはないその角は目を引くが、それ以上に左目側の額に目が行く。そこにはぼつきりと折れた角の痕があった。

「ああ、これか」

私の視線に気づいたのか、彼の手がそこへ行く。不躰な自分が恥ずかしくなり、顔が熱くなった。

「昔……そうだな、もう千年以上も前か。まだ天子が京都にいた頃、公通の祖先へし折られてな。それから綱木の家の者に使役されておる。いやー、あの頃はやつがれも悪だったからな」

かっかっかっかと大仰なくらいに声を上げておかしそうに彼は笑っているが、私には今の話のどこに笑う要素があるのかわからない。

「あの頃はって、今だって十分悪いでしょうが」

そんな彼を見る菰野さんの視線が冷たい。

「昔に比べればやつがれもずいぶん丸くなったぞ。あの当時は大江山の酒呑童子、鴻ノ巣山の……」

「はいはい。その話はもう聞き飽きて、耳にたこができてますから」

滔々と彼は話し出そうとしたが、呆れ気味に菰野さんからため息を落とされあつてなく終了となった。

空気が微妙になったところで先ほどとは違う女性が入ってきて、お茶の準備がされる。着ている服は同じなので、あれは制服なのかもしれない。屋敷が洋風だからか、お茶請けがビスケットだからか、お茶は紅茶のようだ。

「わーっ」

お皿に盛ったビスケットがテーブルに置かれ、菰野さんの目が輝く。もしかして甘いものに目がないのだろうか。

「いっただきまーす」

早速、菰野さんはビスケットに手を伸ばしている。

前髪を眉の上で切りそろえた丸顔の彼は、いかにも軍人になりたてのように見える。さらに美味しそうにビスケットを頬張っている姿は、軍服でなければ帝大生どころか

高等学校の学生と間違えそうだ。

しかし、彼の軍服には少尉の階級章がついていた。

「本当に菰野は菓子が好きだな」

いっぽうの旦那様は長い白髪で、目は人間と違い血のように赤い。ビスケットを齧る口もとからは鋭い牙がのぞいていた。爪は黒くて長く、尖っている。千年以上も生きていたというわりには、若い将校くらいの年齢に見えた。

ただし、こちらの軍服には階級章はついていない。

「どうした？ 食べないのか」

じつと座っている私に彼が怪訝そうな視線を向ける。

「あの、その」

ごく稀に紫乃からお茶に呼ばれることがあったが、テーブルの上のものに手をつけると烈火のごとく怒られた。私の役目はただ黙って、彼女の自慢話を聞くだけ。テーブルの上のものには決して、手をつけてはいけない。

私が食べていいのは皆の食事の準備が済んだあと、鍋の底に残っているものだけだった。なので、目の前のそれを私が食べていいとは思えない。

「ビスケットは嫌いか」

眉を寄せ、不安そうに聞いてくる旦那様が意外だった。こんな感情を母が死んだあ

の日から向けられたことがなく、困ってしまう。

「いえ、その。……いただきます」

おそるおそる伸ばした手は、緊張からぶるぶると細かく震えていた。そろりと遠慮がちにひとつ摘み、口へ入れる。それは口の中でほろりと崩れ、優しい甘さが広がった。

「美味しい、です」

こんな美味しいものを食べたのはいつぶりだろう。遠い昔、母がまだ生きていた頃だ。

「そうか、よかった」

私の感想を聞き、本当に嬉しそうに旦那様が笑う。それが不思議だった。

「では、今度は涼音が自己紹介してくれ」

一段落したところで旦那様が改まり、まだ私は挨拶すらしていないのだと気づいた。「はい」

身体を少し斜めにして旦那様と向き合うようにして座り直し、姿勢を正す。彼は膝の上に頬杖をつき、優しく微笑んで私を見ていた。

「蒿里涼音、です。年は二十歳になりました。異能は……なにも持っていません。申し訳ございません」

膝につくほど深く、頭を下げる。きつと、旦那様はがっかりしているだろう。爵位こそさほど高くはないが異能持ちとしては名門の蒿里家の娘、しかも歴代で一、二を争う先読みの能力を持っていたあの雪姫の娘なのだ。その娘が無能だなんて普通は思わない。

「無能？」

意外そうな旦那様の声が降ってきて、身体がびくりと大きく震えた。

「そんなはずないだろ」

衣擦れの音がし、彼が姿勢を変えたのがわかった。旦那様は疑っているようだが、確かに私は能力をこれっぽっちも持っていないのだ。

能力検定のあと、何度もカード当てに挑戦したが一度たりとも当たらなかった。私は本当に異能を持たない、ただの人間なのだ。

「こんなにうまそうな匂いがするのだぞ？」

気配が近づいてきて、彼がすと私の首筋を嗅ぐ。身体をガタガタと震わせながら、頭を下げた姿勢を保ち続けた。

「これで異能がないなんてありえない」

再び彼が、すんとおいを嗅ぐ。悲鳴が出そうになったが、かろうじて耐えた。

「で、でも。何度試してもダメで……」

「それはやり方が涼音にあつていなかったのではないか」

そんなことがあるのだろうか。世間で試されている方法も全部やってみたが、それでもダメだったのだ。

「何度も言うが、涼音からは上質な霊気のとてもいい匂いがする。傍にいただけこちらの気まで浄化されていくからこそ、お前をやつがれの嫁にしようと決めたのだ」とんだ的外れで、旦那様は失望しているに違いない。このままここを追い出されるのだろうか。そうしたら私は、どうやって生きていったらいいのだろうか。怖くて怖くて、身体がガタガタと震えたが。

「まー、いるだけでやつがれは大助かりなのだから気にすることは無い。異能はのんびり探していけばいいのではないか」

予想とは違うのどかな声が聞こえてきて、旦那様が私に頭を上げさせる。目があうとにっこりと私に微笑みかけ、気にしてないとばかりに抱きしめてきた。

「えっ、あっ」

異性から抱きしめられるという経験のない私はあつという間に全身が熱くなり、口をばくばくとさせて意味をなさない言葉を発する。

「ん？」

そんな私の顔を旦那様が面白そうにのぞき込むので、さらに身体の熱が上がって

いった。

「どーでもいいですけど、そういうのは僕がいけないときにやってくれませんか？ 戦場

で悪鬼のあんたのでれでれした顔、気持ち悪い」

反吐が出るといったふうに、本当に嫌そうに菰野さんが顔を擧める。

「それは悪かった」

それでようやく、旦那様は私を離してくれた。ソファーに手を突き、胸を押さえて
いまだ落ち着かない鼓動をどうにか整えようと努力する。

もしかして私は、彼が異形の鬼だということを抜きにしても、とんでもないところに嫁いできたのではないだろうか。そんな気がしてならない。

「それはそうと、異能がないくらいいでそんなに恐縮する必要なんてないですよ。僕の弟なんて異能があるとはいえ、洗面器に張った水に小波が起こせるくらいですからね
もう、無能と変わりませんよ」

これはもしかして、私を慰めてくれているのだろうか。いきなりこんな優しい人たちに囲まれるなんて、私は夢でも見ているのだろうか。無意識に手が、自分の頬をつねっていた。

「いたっ」

「なにをやっているのだ？」

突然、私に変な行動を取り、ふたりとも訝しがっている。

「あの、その。夢でも見ているのかと思つて……」

ひりひりと痛む頬を手で押さえる。それでもまだ、信じられない。ううん、夢だつたとしてもいい。このままずっと、覚めないで——

「まあ、異能がないのは気にしないでいい。それよりも、その着物をどうにかしないと。なんだそれは、ちんどん屋か」

私の頭のとっぺんからつま先まで視線を這わせたあと、旦那様は愉快そうに笑った。

「ちんどん屋！ 確かに！」

さらに菰野さんは膝を叩いて大爆笑していて、いたたまれない。

「昨日、着ていた着物はさらに酷かったな。我が家のぞうきんのほうがマシだ」

「ぞうきん……」

昨日までの私の着物をぞうきん以下と言われ、なんともいえない気持ちになった。しかし昨日は水たまりで転んだあどだったから、そのせいでそう見えたと思う。

「とりあえず、何枚か急いで作るか。涼音にはきつと、桜色とか似合うと思うのだが」

「はいはい。手配しますよ」

旦那様は想像しているのかうっとりとした顔になったが、菰野さんは完全無視で事

務的に対応している。

「そんな！ 申し訳ないです！ 私はこちらの女中さんの、お下がりとかでいいので」

「はあっ!?」

旦那様——だけでなく、菰野さんまで目玉をひんむき、たいそう驚いた表情で私を見た。

「え、なに言ってるんですか、この子。奥様のお下がりとかならまだわかりますが、女中のお下がりがなんて」

「なあ。うちのメイドにはそれなりに給金を払っているから、お下がりでもあのほろきれよりもずっと上等だが。遠慮しているのはわかるが、なにか違わないか」

ふたりはちらちらと私を見ながら小声で話しているけれど、丸聞こえだった。私としては女中のお下がりをくれなどと無心する時点で、分がすぎていて怒鳴られないか戦々恐々としているのに、どうも違うところで問題になっているようだ。

「ひとつ聞か。涼音は高里家の長女なのだよな？」

言いづらそうに旦那様に確認され、ようやく彼の誤解に気づいた。

「確かに私は長女ですが、無能ですでお情けで家に置いていただいている身です」

「はあっっ」

ふたりの口から大きなため息が落ちていく。

「また無能か」

「あー、やだよ。貴族の異能至上主義」

旦那様は呆れ気味だし、菰野さんは本当に嫌そう。しかし、菰野さんは名門貴族で構成される異能特殊部隊の隊員なのだし、貴族なのでは？

「あれですか、無能の娘を虐げていたとかですか」

菰野さんの声はどこか、侮蔑を含んでいるように感じた。

「きつと、そうだな。だからこの手なのだろう」

しもやけで腫れ、あかぎれもできている、醜い私の手を旦那様が取る。反射的に引つ込めようとしたが、できないように強く握られた。

「うちのメイドたちよりも酷い手をしている」

汚らしいと蔑まれるかと思ったが、旦那様は憐れんでいるように見えた。彼は爪が当たらないように慎重に、優しく私の手を撫でる。

「これからはもう、そんな苦労はしなくていい。やつがれが幸せにしてやる」

じつと彼が私を見つめる。赤い瞳は潤み、泣き出しそうに見えた。

……ああ。この方はこんなにも、知り合ったばかりの私の境遇に同情してくれる

のか。

温かいものが胸の中に溢れてくる。それは収まりきれなくなつて私の目からこぼれ落ちていった。

「あー、泣かせたー」

「あつ、も、申し訳ありま、せん」

菰野さんの指摘で自分が泣いているのだと気づいた。慌てて袖で顔を拭い、泣き止もうと努力する。しかし、涙は一向に止まる気配がない。

「……すまぬ」

申し訳なさそうに旦那様が眉を下げ、ますます悪い気になつてくる。

「あの、その、悪いのは私なので、気にしないでください。その、……嬉しかったものですから」

今まで誰も、私に情けをかけてくれる人などいなかった。やはりきっと、私は夢を見ているに違いない。

「そうか、嬉しかったのか」

旦那様の指先が、私の涙をそつと拭う。眩しそうに目を細めている彼はまるで、私を慈しんでいるように見えた。

「はいはい。そういうのは僕がいけないときにしてください。気持ち悪いんですけど」

立ち読みサンプル はここまで

「おお、すまんな」

菰野さんが吐く真似をし、旦那様はおかしそうに笑った。

菰野さんが帰ったあと、旦那様は屋敷の皆さんに私を紹介してくれた。

「やつがれの嫁の涼音だ。今日からこの家で暮らす。よろしく頼む」

「よ、よろしくお願ひします」

慌てて皆さんに頭を下げる。この家には旦那様の他に女中がふたりと下男がひとり住んでいるそう。菰野さんは官舎に住んでいて、用があるときに旦那様から呼び出されて振り回されているらしい。

「よろしくお願ひいたします、奥さま」

皆さんは挨拶してくれたが、私よりもずっと立派に見えて恐縮してしまう。

「あの、奥さまなんてそんな」

私はそんなに上等な身分ではない。ただ、旦那様になぜか気に入られて、ここに連れてこられただけ。彼は嫁などと言っているが、きっとただの気まぐれに違いない。

「でも、奥さまは奥さまですし……」

皆さんが困惑した表情を浮かべる。気を遣つたつもりが困らせてしまい、途方に暮れた。